

# 台湾王爺祭とその展示考察

邢 繼 萱

## Taiwan's Burning Boat Exhibition

HSING ChiHsuan

Wang-yeh worship is an important folk belief in Taiwan that is reflected in people's lives along the Taiwan coast, especially in the southwest. Wang-yeh worship is celebrated with a burning boat festival, which has a rich marine cultural tradition. The festival contains complete ritual activities that have a long historical tradition and deep culture connotations. The ritual not only invokes religious beliefs, but also includes many traditional folk arts. From local records of the Qing dynasty, it is evident that the ritual performed today has changed greatly from the past because of the loss of the traditional skills required and the loss of the meaning of the original festival. In this study, the exhibition methods of the burning boat festival are delineated. Present displays mostly focus on actual objects in the Wang-yeh boats, but the entire ceremonial process also needs to be considered and displayed. If this approach is taken, people will know better about Wang-yeh culture. The dissertation analyzes the strategies used in Taiwan's burning boat exhibition today and proposes now and more integrated strategies for the future.

Keyword: folk belief, Wanyeh worship, burning boat festival, museum exhibition

キーワード：民間信仰、台湾王爺、王爺祭、博物館展示

### 一 はじめに

台湾全島で広く知られる民間信仰の一つである「王爺信仰」は、台湾の重点文化資産として台湾民間信仰においては重要な地位を占めている。特に、台湾中南部地域は王爺信仰を風靡していると思われる。王爺信仰を中心とする祭祀は「王爺祭」と称され、祭祀を行う時、特に王爺祭りの最後、すなわち祭祀の最高潮とされる「焼王船」という祭祀活動に参加するのは数多くの本土の信者だけでなく、海外観光客の姿も見られる。

王爺祭の風習は道教儀式の「瘟疫醮」から発展し、道教典籍にも船送りの記録が残っているのである。災害や疫病を退散させるための王爺祭祀に不可欠な法具として作られた「王船」は、その形と特徴が現在によく見られる「龍船、龍舟、龍舡」と似ている。従来の「王船」は祭祀の神霊を載って神聖感をもつため、「神舟、神船、仙舟、仙船」などの異称がある。また、古代から「花船、華船、畫船、彩船」と

いう別称もよく使われ、これは王船の華やかな外観から付けられたのである。しかし、王船の建造過程においては細部と素材の拘りや禁忌が多くあるため、王船の文化価値と各部分の意味を全面的に理解するのが一般民衆や信者にとって決して簡単とは言えない。

疫病を退散するために祭祀で神霊の交通道具と使われる王船の造形は、歴史の洗礼を受けて古代船の特徴を保有しており、当地の海洋文化の特色を反映するのであろう。王爺祭の儀式では宗教信仰の内容のほかに、伝統的な民俗芸術や儀式用品の歴史と伝承も含め、これらの内容によって民衆生活の典型的な文化特色がわかる。

祭祀儀式の内容を静態と動態という二つに分ける。静態とは、木製や紙製の王船、王船製作の民間工芸、祭祀用絵画などのような祭祀で使用される儀式用品と指すものである。動態の部分は祭祀に出る「陳頭」、儀式用の伝統音楽、舞踊、武術などの民俗技芸を含むものである。このような静態と動態の角度から見ると、祭祀儀式の内容は濃厚の文化雰囲気有することが明白である。

王船の祭典は実際に古代からの瘟神信仰に深く関係がある根拠は、王船に乘せられる神霊「王爺」が瘟神と思われることである。「王爺」の起源については、台湾民俗研究の先駆者である劉枝萬の『中國道教の祭り信仰』<sup>1)</sup> (1985年) がある。劉氏の文章には歴代の中国文献から、道教「醮」の起源や歴代の祈祷の記録を考証し、各地域の廟と儀式の道具を詳述した。また、これらの資料に基づいて劉枝萬は王船の祭祀が疫病神信仰と関連があると結論した。さらに、劉氏は『台湾民間宗教信仰論集』で王爺起源の伝説を以下のように考察した。

台湾的瘟神傳説主要是，唐太宗時五書生上京赴考，名落孫山，淪為乞丐，奏樂於長安，太宗聞之，召入京中。適太宗欲試張天師法力，命渠等入地窖奏樂，遂被天師誤殺，受封為神。但其時代或情節稍有變容，且人數多增加為三十六或三百六十名。…歸納傳説，可謂三百六十進士死於非命係其骨幹，即為王爺系統。<sup>2)</sup>

以上のように、王爺起源について現在はまだ定説と呼ばれるものはないが、劉氏が提出した「王爺祭」の霊神、疫病を操縦する力を持つ「王爺」は厄病神と見られ、その前身は36人または360人の進士であったという説が、日台中の王船研究界における主流説とされる。また、厄病神信仰を研究する Paul Katz<sup>3)</sup>によれば、王船に関わる最初の記録は1133年に莊綽が書いた『雞肋篇』に見られる。

澧州作五瘟社，旌旗儀物，皆王者所用。唯赭傘不敢施，而以油冒焉。以輕木制大舟，長數十丈，舳艫檣柁，無一不備，飾以五采。郡人皆書其姓名年甲及所為佛事之類為狀，以載於舟中，浮於江中，謂之送瘟。<sup>4)</sup>

1) 劉枝萬、『台灣民間宗教信仰論集』、聯經出版社、1983年、287頁

2) 同上、230頁

3) Paul Katz、『Demon Hordes and Burning Boats』、State University of New York Press、1995年、217頁

4) 莊季裕、『雞肋篇』、新文豐出版公司、1980年、56頁

澧州地方（湖南省澧州）では、疫病をつかさどる「五瘟使者」を祭祀する際に、木材で造った何十丈長さほどの船を主な祭祀物として五瘟送りの儀式を行う。民衆や信者はそれぞれの氏名と生辰年月日および佛事を書状に作成して船に積み込む。最後には、その船を河に浮かべて沖へ向けて帆で走らせる。このような儀式活動は五瘟送りと呼ばれる。中国南部地域における五瘟送りは端午節で行われ、信者たちが王船を造って疫病を駆逐するのである。

このような「瘟疫送り」祭祀の形式は各地の地方誌にしばしば見られ、台湾の王爺信仰にも大きな影響を与えたと思われる。現在の台湾では、古くから伝わる「瘟疫送り」の儀式と融合した王爺祭りが複雑な祭祀の流れがあり、王船送りの儀式は従来の疫病退散の機能のみならず、「代天巡狩」の内容も加えた。「代天巡狩」とは、文字の示すように、世の中を守備するために「天子」の代わりに世間を巡視して回るという意味である。

これが本来は皇帝が各諸侯国を自ら視察する代わりに、臣子である各諸侯に命じて諸国を巡視させるという「巡狩禮」のことを指すのであるが、明末時期に、明朝政府より宗教迷信を禁止する法令を施したことで、中国の閩南地域における禮製に通暁する儒者たちが、この法令に応じて、従来の民間で行われた五帝や疫病神を送る儀式を封建體製から生まれた「巡狩禮」と融合しながら、封建社会の礼制に認可された「代天巡狩」の送迎儀式を発展させた。すなわち、人間世界を守護するために王爺祭りの神霊「王爺」は、人間の皇帝に従う各国の諸侯のように、最高神の「玉皇大帝」の命令を受けて天神にかわって下界の人間世界を視察するのである<sup>5)</sup>。中国官僚制度の一つとして「代天巡狩」制度は王爺信仰と融合して民間信仰の儀式に転化された。この転化は民俗活動が官僚体制への模倣の体現と考えられる。それゆえに、現在の王爺祭祀においては、「代天巡狩」が台湾王爺信仰の不可欠な内容となった。

現在の王爺祭祀を全面的に見れば、数多くの複雑な儀式があるが、この中で最も注目されるのは王爺祭り最後の儀式、すなわち「焼王船」ではないかと思われる。しかし、王爺祭祀という舞台の主役「王船」は、王爺祭りの閉幕とともに火で焼き滅ぼされる運命から逃れられない。大量な人力と物力がかかっても祭祀の最後には王船が火を放って焼き滅ぼすのであるため、祭祀用の王船は一過性の消耗品と言える。したがって、このような王船儀式の特点是王船の実物を永久に保存できなくなる。近年、王船のような民俗文化の技芸保持者の高齢化及び継承者の不足等の現況により、消滅危機に瀕している無形民俗文化が衰退していくためにその保存と振興の緊急性は甚だしい課題と見られている。

そこで、本文は展示学の角度から現有の王船展示の優劣点を分析しながら、王船文化をどのように保存すべきかを探求するものである。

## 二 王爺信仰の歴史

王爺信仰は台湾の重要な民間信仰であり、この二百年間で西南海岸に沿いで広く信仰された。この信仰は沿海生活の特色を映し出しており、豊かな海洋文化を含んでいる。また、王爺信仰は複雑な儀式が含まれ、長い歴史的伝統があり、儀式のほかに目に見えない裏の部分も王爺文化の一部である。王爺信

5) 李豊楙、禮祝之儒：代巡信仰の神道觀、中正漢學研究、2014年、207-228頁

仰や儀式の中から生まれた祭儀、舞踊、工芸技術などの無形的文化を今でも色濃く伝えており、儀式の伝承も重要な課題だと考えられる。台湾の漢民族は、明末清初以降、中國大陸の東南沿海地区から渡來した、現地の信仰文化が人びとの移住とともにもたらした。王爺信仰は中國から由來し、王船や王爺祭祀についての記録を地方志によって儀式の構造を明らかになる。例えば、『光緒澎湖廳志』の第十五卷には、「各澳皆有大王廟、神各有姓。民間崇奉維謹、甚至造王船設王醮、其說亦自內地傳來。」<sup>6)</sup>と記されている。これは台湾における王爺信仰が直接中国と歴史的な関係がある証拠である。そして、清康熙56年(1717年)に書かれた地方誌の『諸羅縣志』序刊本の第12卷には王爺祭祀に関する記述は以下のようにある。

俗傳荒郊多鬼、白日幻形。雜過客為侶、至僻地即罹其害。晨昏或現、相獐猯、遇者驚悸輒病故。清明中元延僧道誦經設醮之事日、多斂金造船器、用幣帛服食悉備召巫設壇、名曰王醮。醮三歲一舉以送瘟王、醮畢、盛席演戲、執事儼恪、踞進酒食。既畢、乃送船入水、順流揚帆以去。或泊其岸、則其鄉多厲必更禳之。相傳、昔有荷蘭人夜遇船於海洋、疑為賊艘舉砲攻擊、往來閃爍至天明、望見滿船皆紙糊神像。眾大駭、不數日疫死過半。近年有輿船焚諸水次者、代木以竹五采紙褙而飾之、每一醮動數百金、少亦中人數倍之產、雖窮鄉僻壤莫敢恡者。<sup>7)</sup>

また、康熙59年(1720年)の『臺灣縣志』第10卷の内容によれば、

臺尙王醮、三年一舉、取送瘟之義也。附郭鄉村皆然境內之人、鳩金造船設瘟王三座紙爲之。延道士設醮或二日夜三日夜不等、總以末日盛設筵席演戲、名曰請王。進酒上菜、擇一人曉事者跪而致之。酒畢、將瘟王置船上、凡百食物器用財寶無一不且十餘年以前、船皆製造風篷桅舵畢備。醮畢送至大海、然後駕小船回來。近年易木以竹、用紙製成物用皆同。醮畢、抬至水涯焚焉。凡設一醮、動費數百金、即至省者亦近百焉、眞爲無益之費也。沿習既久、禁止實難節費省用、是在賢有司加之意焉耳。相傳昔年有王船一隻、放至海中與荷蘭舟相遇、炮火矢石攻擊一夜、比及天明、見滿船人衆悉係紙裝成。荷蘭大怖、死者甚多、是亦不經之談也。<sup>8)</sup>

とあるように、この二つ記事には年代を明記されていないが、地方志の記録により、オランダ人が来航する16世紀の明朝時代に王爺祭祀の儀礼活動がすでに存在したことが判明した。さらに、清代乾隆20年(1747年)に、『重修臺灣府志』卷二十五においても過去の王爺祭状況について述べられている。

俗尙演劇、凡寺廟佛誕擇數人以上、主其事名曰頭家、斂金於境內演戲以慶、鄉間亦然。臺俗尙王醮、三年一舉、取送瘟之義也。附郭鄉村皆然境內之人、鳩金造船設瘟王三座紙爲之。延道士設醮

6) 林豪纂、清光緒『澎湖廳志』、第8卷、「風俗」篇、臺灣省文獻委員會、1993年、325頁

7) 陳夢林纂、清康熙『諸羅縣志』五十六年序刊本、第8卷、臺灣省文獻委員會、1993年、150頁

8) 陳文達纂、清康熙『臺灣縣志』五十九年序刊本、第10卷、臺灣省文獻委員會、1993年、61頁



或二日夜三日夜不等、總以末日盛設筵席演戲、名曰請王。執事儼恪、跪進酒食。既畢、將瘟王置船上、凡百食物器用財寶無一不具。送船入水、順流揚帆以去、或泊其岸、則其鄉多厲必更禳之。每一醮動費數百金、省亦近百焉、雖窮鄉僻壤莫敢吝者。<sup>9)</sup>

以上の記述によって、清代康熙年代の王爺祭は大規模な行事として定期的に行われていたことが明確した。台湾各地で開催された王爺祭祀は「科年」によって行われるか、あるいは神の意嚮に応じるため不定期に挙行される。地方志には三年一回で行われ、祭祀の儀式は二、三日続いたという記録と同じように、現在台湾の王爺祭は地方により三年か五年おきに開催されるが、十二年を経て一回しか行われなところもある。さらに、記録のように五穀豊穡の時期に行われ、神の示意で行われたこともある。祭祀時間は一週間で続くことが多く、数月に持続する地域もある。

また、地方志から見ると、王爺祭祀の方式は、「遊天河」と「遊地河」二種類がある。清光緒5年（1879年）の『澎湖廳志』第8巻では、

各澳皆有大王廟神、各有姓。民間崇奉維謹甚至造王船設王醮、其說亦自內地傳來。內地所造王船、有所謂福料者、堅緻整肅旗幟皆綢緞鮮明奪目。有龍林料者、有半木半紙者。造畢、或擇日付之一炬、謂之遊天河。或派數人駕船遊海上、謂之遊地河。皆維神所命焉、神各有乩童、或以乩筆指示比比然也。

澎地值豐樂之歲、亦造王船。顧不若內地之堅整也、具體而已、間多以紙為之、然費已不貲矣。或內地王船偶遊至港、船中虛無一人、自能轉舵入口、下帆下棹不差分寸、故民間相驚以為神、曰王船至矣。則舉國若狂畏敬持甚、聚眾鳩錢奉其神於該鄉王廟、建醮演戲設席、祀王如請客。然以本廟之神為主、頭家皆肅衣冠、跪進酒食。祀畢、仍送之遊海、或即焚化亦維神所命云、竊謂造船送王、亦古者逐疫之意、使遊魂滯魄有所依、歸而不復為厲也。

南人尚鬼積習相沿、故此風特甚、亦聖賢所不盡禁、然費用未免過奢、則在當局者之善於撙節已紀略謂澎人信鬼、尚巫疾病不問醫藥、只求神問卜而已、惟無僧尼寺觀、婦女亦無上廟燒香朝山禮拜之事、其說不也。蓋南方尚鬼、有疾問神問卜者、各處皆然、不但澎湖而已、而澎人亦非不問醫藥也。若皆不醫不藥、則媽宮街熟藥店有十餘處、豈皆虛設哉。又澎湖本無山寺、安有朝山禮拜之事、而入廟燒香習俗、恆有之、但不如他處之甚耳<sup>10)</sup>

とあるように、「送王船」の儀式によって、燃やすものを「遊天河」と称し、水に流すものを「遊地河」と呼ばれる。祭典とは、道士を招いて「建醮」し、紙または木材で作った王船を流すことで、主神の王爺を流すことを送瘟という。しかし、現在の王爺祭りの儀式は、王船を流すのではなく、火を放って焼き滅ぼすのほうが多い。三年一回で「迎王」と呼ばれるこの祭祀儀式として、王爺祭は台湾で最も人気がある民間信仰の祭祀活動と思われる。

9) 范咸纂、清乾隆『重修臺灣府志』、第25巻、臺灣省文獻委員會、1993年、96頁

10) 林豪纂、『澎湖廳志』清光緒五年、第8巻、「風俗」篇、臺灣省文獻委員會、1993年、325頁

### 三 現在の王爺祭

台湾の王爺祭りは、多くの廟で開催されており、特に、台湾中南部地域は王爺信仰を風靡していると思われる。伝統祭祀は時代とともに簡略化され、消えていったが、王爺信仰の祭祀活動は清代初期の漢人が台湾に来た時から続いて途切れることはなかった。現在、台湾政府は王爺信仰を関連民俗に指定し、国内外観光客を誘致するために王船文化を旅行資源として各地政府が王爺祭祀活動を行なった。そのうち、台南市の東港において三年一回で定期開催する民俗行事の「迎王平安祭り」は、全台湾範囲で現存規模最大の王爺祭儀と言われる。その儀式は台湾の王爺祭儀の最も代表的な行事である。本研究では、乙未正科（2015年）の屏東王爺祭りを例として、現在の王爺祭活動の流れを見てみる。



写真1 2015年屏東王爺祭りのパンフレット

過去に書かれた記録から、王爺祭の儀式の主な目的は疫病を送るためである。時間の推移とともに、科学技術の進歩は環境衛生を改善させ、王船と疫病神に対して台湾の人々が新たな考えと見解を提出した。このような背景において疫病神の地位と身分が社会の認可と肯定を獲得し、また、歴史伝説、民間故事と結合して疫病神から忠実な英雄、さらに代天巡狩王爺に変わった。現在の王爺祭儀の流れは、造王船、迎王、御輿の巡境、王船の「醺」から送王までの過程が複雑で、それぞれの儀典は多くの細部科儀に分かれており、儀式の事前準備から最後の送王まで通常は二年以上かかる。

三年一回の屏東県東港町の王爺祭は、信者人数と開催規模は最大で、坊間には「北西港、南東港」と呼ばれる。近年は旧暦9月に行われることが多くなる、現在の王船儀式の流れは、「角頭職務輪任」、「造王船」、「中軍府安座」、「進表」、「設置代天府」という五つの事前作業と、「請水・恭請王駕」、「過火安座」、「出巡繞境」、「祀王」、「遷船繞境」、「和瘟押煞」、「宴王」、「送王・焼王船」という八つの送迎王事項、合計で十三個の事項がある。次は王爺祭祀の流れについて詳しく解説する。

「角頭職務輪任」は祭の責任者による決まる。これらの筈で選出される役職は「迎王」までの準備事項の進行と運営を担当する。王爺千歳前の抽選で次科各角頭の職司役、大総理、副総理、参事、理事の人選を決めて、祭りの主要な祭祀員を務める。こうした行事の人選の基盤になる領域は角頭なのである。

「造王船」とは、字面のように王船を作ることである。王船は儀式の最も重要な法器であり、王船は主

に疫病、殺気、悪鬼を搭載して去って、地方の平穏を守っていた。若い頃、民衆の生活物資が不足していたため、王船の建設は竹架の紙糊であったことが多く、その後木造に変更された。通常、王船の大きさは廟の筈で決定される。建造期間は四ヶ月程度かかる。東港は台湾の重要漁港の一つであり、造船師匠の技術に優れているため、王船の建造過程は古法に従って完成し、王船用の木材を建造するだけで数百万円がかかる。

「請王」とは、祭祀の主神「王爺」を海岸で奉迎する儀式である。当地では「請水」とも呼ばれ、祭祀を始めるという意味がある。東港の海辺で行われる原因は、信者が奉迎する代天巡狩の王爺は王船に乗って人間世界へ赴くからである。そこで、「請水」の時に、他の廟の神輿が砂の上に今年来ている「王爺」と思われるものの姓を書く（通常当科が迎える王爺の姓、廟の大総理など少数の者にしか知られていない）。毎年来場の「王爺」が異なるため、姓が正確であれば、すぐに廟の職員に確認され、遶境に出発する。

「過火」は火の浄化力によって、神像を浄化する目的で行われる。神明が過火すると神の力を増し、信徒が過火すると体の平安を守ると信じられている。島の主要な廟の神輿の順で、火の上を駆け抜ける。

「出巡遶境」は王爺の神輿が特定な場所を練り歩くことを指す。これらの練り歩きは地方を巡り「平安」を与えるとされる。信者は王爺を迎え、また列になって神輿の下をくぐる。各廟陣頭が神輿に従って巡視し、爆竹の音が四方に起き、非常ににぎやかである。

「遷船」とは王船が船場から出るという儀式である。送王の前日の午後に行われ、地方の主要街道を盛大に巡行した。船を移す目的は沿道で疫病退治の含意を受け、疫鬼と災禍を追い払うという意味がある。船を移す時「陸上行舟」と呼ばれて、場面は非常に壮観だ。一部の家は道教式でよく使われる紙人を用意し、家族の代わりに厄を王船に連れて行き、平安になると信じられている。

「送王」は王船を燃やして王爺を天に送り帰すことである。これは王爺祭の最後の儀式と呼ばれ、王船と祭の委員が位置を決めてから、王爺の神輿から令牌を取出し、船の中に納める。吉辰をとして、道士は船の前後の碇を上げ、船の前面の所に水をまく。これは、海への水路を開くということを示す。その後王船と金紙に点火する。全ての神輿は船があらかた燃え尽きたのを見届けてそれぞれの廟へ帰る。

王爺は台湾の漢民族にとって重要な宗教信仰である。王爺はもともと代天巡狩の疫病神であったが、移民の播遷に伴って台湾各地の地方の守護神と変換した。王爺祭儀は「送瘟逐疫」の意味から現在は「平安祭り」や「民俗観光」に転化した。王爺信仰は民心を鎮撫しすることと厄除けの宗教機能を持つほか、王爺祭儀を通して、伝統戯曲、陣頭、王爺祭儀などのような各種類の宗教儀式や伝統的な工芸美術（例えば王船彩画、積載品、造船技術）も保存できるようになった。さらに、国民に生態保護、環境衛生、疫病、伝染病の流行を避けることへの注意を喚起することが王爺信仰の現代的な意義である。

#### 四 王爺祭の展示

本研究では、王爺信仰文物館の現場調査に基づいて王爺祭の展示を研究する。王爺信仰文物館は地元の東隆宮によって設立され、主に台湾の民間信仰文化を展示している。一階の展覧ホールでは、「王爺祭」儀礼の様子が展示し、宋江陣を体験することもできる。三階の「王爺信仰文物館」は全館で最も重



要な展示場所で、王爺の由来伝承を説明している。四階の「禮俗文物館」と「水滸英雄館」には金銀紙など儀式の道具を紹介し、『水滸伝』の英雄模型を展示している。このうちに王爺信仰展示館は少数の宗教文化をテーマにする博物館である。全館には七つの展示テーマがあり、1. 中国と台湾の代天巡狩王爺、2. 三寮湾東隆宮の王爺信仰、3. 王爺遶境と陣頭、4. 請王と安座、5. 王醮醮典、6. 祀宴王爺、7. 王船信仰と道教信仰という七つ点からまとめることができる。

館内では、台湾の王爺信仰の発展源流を巡って、廟の運営者が長期に収集保存している王爺信仰と関連する文献と写真が展示されている（写真1、写真2）。展示場では、各地の「王爺遶境」で使用される樟木彫の模型が展示しており、また、祭祀で使われる器具、書物、衣類、日用品、炊事用具、食物やその他小物などの儀式用品がみられる。このような静態的展示を通じて、図文の解説に合わせ、王爺祭の儀式で出現した民俗芸術と知識を観客へ紹介できる。



写真2 祭りの写真



写真3 信仰関連文献

中央展示場では大きな展示コーナーが設置され（写真3）、往年の農村生活神事を行う王船を迎える過程を展示している。そして、王爺祭での「遶境」、「陣頭パフォーマンス」、「王爺廟」や祭祀中の人々の様子などのクスノキ彫刻がみられるほか、解説文板も付けられている。

王爺の遶境は、神威を宣揚する以外、魔よけのために郷民へ祝福を賜ることである。早期の農業社会は医療技術が不足で、人々は生きる状態を維持するために自分の人生を神へ託して、神からの懲罰と祝福を全部受けるという背景において、庶民にとっては神事を行うことは大事と思われるも当然である。

境内を巡迴する行列は、その性質に応じて前衛陣、中間陣と主神陣に分けられる。前衛陣は、道案内、通報などの機能を持ち、「報馬仔」、「鼓吹陣頭」などから構成される。中間陣は主神陣と前衛陣の中間に並んでおり、会体も活気を帯びて、行列全体で最も注目される陣である。主神陣は神輿を中心に、神に関わる人を伴って練り歩く。行列の最後には香客、信者、観客などの一般参加者が付いて進行する。このような行列の模型も展示している（写真4、写真6）。音楽と踊りとともに威風堂々とした巡迴行列は民衆の巨大な信仰の力を示しているが、もし巡迴途中の動画や音楽の展示があれば、観客に対してこの儀式の様子を理解しやすくなるかもしれない。

陣頭を担当する台湾の民族芸芸団は、宗教的なイベント時パフォーマンスをするという団体である。



一般に陣頭と呼ばれるのは、文陣と武陣の二つ種類があり、文陣には南管、北管があり、武陣には金獅陣、宋江陣、蜈蚣陣などがある。それ以外に「車鼓陣」、「高蹺陣」、「素蘭出嫁」、「牛鋤陣」、「桃花過渡」などの非正式な陣頭もある。館内の模型展示の数量は非常に多く、様々な陣頭展示が混在している。模型のそばに説明があれば、わかりやすいと思われる。



写真 4 王爺祭の遶境行列



写真 5 陣頭の一部

王船は王爺祭りの魂と言え、展示場では「王船信仰」のコーナー、王船の模型、王船の各部位の船室構造、細部の名称、さらに王船に乗せる生活用品、食べ物、文房具などが展示され、多様な形や色を示すコーナーがみられる（写真5）。



写真 6 王船に乗せる生活用品



写真 7 王船が船場から出る様子

この博物館における展示の欠点の一つは、模型に対する解説が足りないという点である。展示物の文字史料があっても、解説内容で伝えられない情報が物理的制約を受ける。たとえば陣頭で演技する舞踊や、それぞれが使用する道具をどのように操縦するか、これは静的な展示だけで表現できないであろう。もし王爺祭の動画が祭祀道具と結合すれば、観客にとって文字説明で想像にくい部分をこの方法で理解できるようになるかもしれない。

普段王船を見ない信者に対して、展示用の王船が置かれている。これは東隆宮の王船職人は大部分が70歳になって、造船技術が伝わらない可能性が高いからである。そこで博物館を運営する理事會は「典藏用王船」をつくり、王船を社会に公開できるようにすることを決議した。展示用の王船は祭祀用の王船と同じ型式で、大きさは王船の半分ほどである。しかし、この「典藏用王船」に対する解説が簡単な

文字説明のみであることが少々残念だと考えられる。これは台湾王船の最大な特色が船全身に飾れる民俗の色絵であり、各細部に書かれる色絵へのこだわりと、王船の帆柱、船体、船尾、船室、さらに王船に載せられる物品にも意義があることからである。(写真7～10)。



写真8 船の様子



写真9 船底の図「魚」、豊漁を祈願する



写真10 船首の図「財子壽」



写真11 船側の図「八仙」

台湾の王船の特色は大量の彩飾運用にある。王船の建造が完成した後、彩飾を開始し、船体の部位によって、その彩飾の題材も異なっている。だが、現場の王船展示ではこれについての説明は見られなかった。王船の材質と形は各地の需要によって違いがあるため、どの船も唯一無二のものと言える。祭祀の最後に王船は火で焼き滅ぼされる運命から逃れられないため、このような無形の文化をどう保存するかを考えるべきであろう。

## 五 おわりに

中国閩南地域において王爺信仰は明代から広まり、隆盛が見えるようになったのが清代以降ではないかと思われる。明末清初、閩粵地域に発祥した王爺信仰文化は、中国沿海地域における移民活動の発展とともに台湾へ伝播された。こうして長い年月をかけ、中国沿海各地における民俗信仰は台湾本土の文化や言語の影響を受け、各地域や民族の個性と融合した独特の民間信仰となっていく。

このように形成された瘟神信仰とその儀式は、台湾民間信仰において重要な一環として、台湾本島の民俗風習に重大な影響を与え、清代以降、台湾における王爺を主神とする廟の数量はほかの神の廟より

圧倒的に多く、発祥地の中国から伝来された「王醮」風習の特徴が現在まで保存できるようになった。

近年、台湾では国内外観光客を誘致するために王船文化を旅行資源として各地政府が王爺祭祀活動を行なった。しかし、当地の観光資源として開かれた王爺祭りは、滅多にその王船信仰に関わる民俗儀式の文化と歴史の価値に観客の注目を向けさせない。さらに、王爺祭の主役となる王船の建造は、長時間かかり且つ繁雑な造船技術などの原因で、民衆は造船流れや王船の細部へのこだわりに対して理解できなく、また、若者が王船文化に関する知的な関心や興味をそそられなくなることは、王船文化の伝承窮地に追い詰められている。

王爺祭祀の儀式内容を静態と動態二つに分ける。静態とは、木製や紙製の王船、王船製作の民間工芸、祭祀用絵画などのような祭祀で使用される儀式用品と指すものである。動態の部分は祭祀に出る「陳頭」、儀式用の伝統音楽、舞踊、武術などの民俗技芸を含むものである。このような静態と動態の角度から見ると、祭祀儀式の内容は濃厚の文化雰囲気有することが明白である。現在の王船儀式の流れは、「角頭職務輪任」、「造王船」、「中軍府安座」、「進表」、「設置代天府」という五つの事前作業と、「請水-恭請王駕」、「過火安座」、「出巡繞境」、「祀王」、「遷船繞境」、「和瘟押煞」、「宴王」、「送王-燒王船」という八つの送迎王事項、合計で十三個の事項がある。現代の科学水準やマルチメディア技術の進歩の背景において、王爺祭祀に関わる文化意義の伝承と展示は本研究の課題となる。

王船に関する儀礼と御輿の巡境などの送迎王事項が民衆に見られるが、大衆にとって王船信仰の祭祀活動は実際に「燒王船」の印象だけに残っている。この現状から考えると、王爺祭祀の事前作業や儀礼実践の全体像とその意味は、世俗社会でまだ未公開な状態にとどまっている。王船文化の展示主眼は、王船の実物に限らず、さらにこのような一般民衆に注目されていない儀礼事項と儀礼の意味を観客へ伝えることだと思われる。台湾においてこれまでの王船文化の展示は、王船の模型や王爺祭祀の画像資料などの王船にかかわる実物を巡って行われる。だが、民俗信仰文化の特殊性をもつ王爺祭祀の展示にとっては、民衆が参与できない「燒王船」前の事前作業と儀礼実践は、王船展示の欠かせない部分、すなわち王船文化を大衆に普及するため開かれた王船展示の目的だと言えるであろう。王船自身だけでなく、祭祀活動で不可欠な事前作業と儀礼実践及び儀礼の意義のような無形文化についての展示研究は本文のもう一つ問題点である。

台湾台南市の王爺信仰文物館において王船文化の展示状況について現地調査を行い、この実地調査によれば、王船の建造技術を保存するため、当館はわざと儀礼用王船と同様な材料と技術を使って、1:2の比例で「典藏用王船」を造った。このように造った王船は最高の展示物であることにも関わらず、この「典藏用王船」に対する解説が簡単な文字説明のみであることが少々残念だと考えられる。これは台湾王船の最大な特色が船全身に飾れる民俗の色絵であり、各細部に書かれる色絵へのこだわりと、王船の帆柱、船体、船尾、船室、さらに王船に載せられる物品にも意義があることからである。簡単な文字説明のみでこれらの特色についての情報や知識は十分に伝われない。

本研究の分析によって、現在の王爺祭祀の儀礼事項は過去より繁雑で、時代の変遷とともに新たな内容を付けられていることが明白である。急速に発展している科学技術の背景において、現代博物館の展示方式は、実物展示を中心とする静態的展示に限らず、マルチメディア技術と双方向性の展示のような動態的展示も加えた。王爺祭祀を全面的に把握する上で、王船文化の特徴と結合しながら、どのように

展示すべきかを探求する。適切な展示方式は文化の意義と価値を保留できることだけでなく、異文化理解の鍵になる。